

亡き夫とともにこの道を歩む。

朝霞教会 清水佑季子さん

清水さんの半生は試練の連続だった。長男のダウン症、夫の上咽頭がん、自身のパニック障害、その後、夫はくも膜下出血で意識不明の寝たきりに。だが、悲嘆にくれながらも乗り越えてこられたのは、仏教を共に学ぶ仲間たちの存在だった。同じように子どもの発達の問題を抱えながらも笑顔を保ち、やさしい人や病に侵されても毎日を感じて送る人。そうした人たちとの交流により、「苦にとらわれずに、現実をありのままに受けとめ、一瞬一瞬を一所懸命に生きよう」と決心。意識のない夫に語りかける日々でも不思議と心は落ち着いていた。約4年におよぶ闘病の末に亡くなってしまった今でも、「いつもそばで夫が見守ってくれている」と安心感に包まれている。長男は頼もしく成長し、清水さんとともに信仰に親しんでいる。その姿を見ることが、いまの大きな喜びであり、生きがいとなっている。



慈しみの眼をもつて

「慈眼をもつて衆生を視る 福聚の海無量なり」——
法華経「観世音菩薩普門品」の名句として知られる一節です。慈悲の眼で衆生を視れば無量の福が聚まるというのですが、慈悲の眼で世間や人びとを見るとは、どのようなことを大切にする見方なのでしょう。か。
ある詩人が、その答えともいえる仏の教えの真実を、やさしく説き明かしています。その作品の一部をご紹介します。

「わたしが人を責めることをしないならば／それが観世音菩薩であり／あなたがわたしを許してくださいならば／そこに聖観世音菩薩は 現前しておられる／観世音菩薩というのは／世界を流れている 深い慈愛心であり／あなたの内にも わたしの内にも流れている／ひとつの 深い慈悲心のことなのである」
この詩を手がかりに考えれば、だれのなかにも、観世音菩薩と同様の深い慈悲心が流れていると見ることで、そして、一人ひとり別々の生き方をしている、ともに全体のなかの一人として自己一体の大きな「いのち」を生きており、互いにそのような尊い命をいただいていると見ることで、それが、無量の福を呼ぶ慈しみの眼といえるのです。

立正佼成会